

第11回せんがわ劇場演劇コンクール

受賞者インタビュー

俳優賞

吉増裕士さん（ほろびて）

- 吉増裕士 Yuji Yoshimasu
1969年 北海道生まれ。'98年より劇団「ナイロン100℃」に参加。以後、劇団員として活動中。また'00年より自身が作・演出を務めるユニット「リボルブ方式」を旗揚げし、活動を行っている。

『音埜淳の凄まじくボンヤリした人生』（2015）

『つながらない〈null〉を巡るこどもとおとなのものがたり』（2018）

『公園まであとすこし』（2019）

にてほろびてに参加。



今回参加されたほろびて『あるこくはく』では俳優賞も含めて三部門（グランプリ、劇作家賞）受賞されましたが、今の率直なお気持ちをお聞かせください。

グランプリはもちろん、今回のカンパニーとして、作品自体を評価して頂けたのがとにかくとても嬉しいです。

俳優賞に関しては本当に「まさか」というか、そんなことは一ミリも想像していなかったの…。実は本番では台詞を間違ったり噛んだりしてかなり落ち込んでいましたから、まずその時点でないだろうというのはありました。

コンクール自体のコンセプトとしても「次世代の育成プロジェクト」ということで、僕はもう52歳ですからコンセプトと合致しているのかな、という戸惑いもあって、俳優賞を頂けたのは嬉しいんですがなんとなく整理がつかない部分はあります（笑）。

細川さんのインタビューでも、グランプリはもちろん、吉増さんが俳優賞を獲ったのが何よりも嬉しかったと仰っていました。

僕の上演は一日目の29日でしたけど、その終演後の落ち込みようだったらなかったと思うので…。

どんな舞台もお客様の前で上演するのはその一回きりですから。何十回公演があろうとも、その一回きをやるのだということはもちろんわかっていたつもりでしたが、本当に今回のコンクールでの上演を通じて改めてその「一回きりである」ということを実感しました。

一回しかない評価をされるところで失敗をしたということでもう「ああ、こういうことだ…」と落ち込みました。「ほかのどんな公演でも常にこの状態なんだぞ！」ということを実感することができて、勉強になりました。

本当に感謝です。コンクールさまさまですね

今回上演された作品について、稽古場ではどのようなつくりかたをされていたんでしょうか。

今回の作品に関しては割と細川君自身の中できっちりと台本としてこだわっている部分が強くあるという話もしていたので、台本についての議論はそれほどなかったです。

僕らとしては稽古を通じてそれを読み取って、それを立ち上げていくということに注力していた気がします。個人個人の立ち位置とかこの台本の中での役割について、役者と演出との間で話すことが多かったですね。

吉増さんご自身は父親役として、かなり印象深い父親を演じられました。

今回の『あるこくはく』は差別などの問題をはらんではいらんですけど、最初に戸惑ったのは石という登場人物がいること、そして彼は結局石なのだということです。

父親としてはそれまでまったく、差別すら意識していなかったようなものが、娘に連れられて目の前に現れる。

その戸惑いが差別に見えるようなものになったりする、という所を意識しながらつくりました。父親としてもあまり最初から明確に「差別するんだ」という事ではない形で表現をしたいなということで演出とも話しましたし、自分で台本を読んでいる中でもそう思っていました。



娘に対しても「娘が小さい頃に集めた石を僕も大事に取っていた」という娘への思いが表れるセリフが一行あったので、そこを掬った上で実際のシーンでは娘のこともあんまり考えずにやろうというか、娘を思って「石と一緒にあったってどうしようもないんだ」という気持ちすら、あまり表面に出さないでやろうとっていましたね。

稽古の最初の方では娘のことを思ってちょっと娘を説得するような、そういう感情でやっていたんです。それが演出からなかなかOKが出なくてですね。

あまり父親として「説得する」とか「必死になる」というよりはむしろほとんど笑ってしまうというか、相手の話を聞いていても「話にならない」というか、そういう鼻にもかけてない、そもそもがありえないという作り方になっていきました。

そうして最後の方では娘すら嫌いになってくる、という感じでやっていました。

それがとても父権的に見えたり嫌な感じに見えたりしたのかもしれませんが、僕の中ではあまり「嫌な感じで演じよう」ということはありませんでした。

あと「絶対に巻舌にはならないようにしよう」ということは気を付けていましたが…。

今回の台詞の中に、石と娘に対して「自分を説得する言葉をくれ！」という言葉があるんです。石という存在を馬鹿にしていて相手にはしてないんですけど、なるべく言葉で何かを伝え、受け取る姿勢の父親というイメージで演じました。そう言いつつも暴力が出てしまうという…。

細川君の書いた台本の最初のページのタイトルのすぐ横に「言葉は言動と一致しない」という言葉が書いてあったんです。細川君はそれについて特に説明はしていませんでしたが、タイトルの横に一言書いてあって。

言葉と言動、理性と暴力とか…。そのさじ加減にすごく気を遣いました。

稽古場で吉増さん自身が俳優として考えていらっしゃったことについて、もう詳しく聞かせて頂けますか。

石との関係、石と父のやり取りについては、とにかく噛み合っていない「話になってない」部分をお互いにどう見せるかということをお互いに藤代さんと話し合いました。

どうしても石の藤代くんの方も深刻になったり、「差別される側」というニュアンスが強く出過ぎてしまったりすると「どうも弾んでいかないね」ということを演出の細川君も含めて話しあったりして。

じゃあお互いどう進めるか、という中で僕の方ももっと説得するというよりも「もう話にならない」というので思わず笑ってしまうという方向性、それに合わせて石の彼も気持ちの上での反感はあったとしても逆らわずに会話が流れていくようなイメージでつくって進めることにしました。

また舞台の上での関係性として”3人+1人（四葉）”という感じがお客様にどう見えたらいいのだろうか、どういう画になったらより面白いだろうかという技術的な話はよくしていました。

市民審査員の方も仰っていましたけど、外から見るとこの作品は割と不条理な劇なんですよ。登場人物として石が出てくるわけですからその状況自体がもうおかしくて、さらに舞台上に他の登場人物に絡まない女の子が1人寝ている。

なので全体の状況としては不条理なんだけど、登場人物それぞれが話す言葉はそれぞれの条理に合っているというか、ただ不条理な事を言うということではなくて、それぞれの信条とするところや考えるところはしっかり表現しようということは意識しましたね。

それぞれがそれぞれの日常を生きている。それぞれが生きている日常をきっちり稽古場にもってきて、それをすり合わせていこうということは俳優みんなでコンセンサスを取った気がします。そのズレがたぶんどんどんおもしろくなっていく台本なので。

一見不条理に思えても個々の役の中にはそれぞれの条理が備わっている。俳優にゆだねられる部分が大きいからこそ、ひとりひとりの役の世界について俳優個人できめ細やかに埋めていこうという作業だったんですね。

そうですね。誰もおかしいことはやっていないし、それぞれが真面目にそれぞれの生き方をしているものが、俯瞰して見てみると不条理なことが起きている、というふうに考えていました。

そうした一人一人のやりとりを通じて生れてくるイメージが差別的なことであったり、細川君の中にあるテーマなのかもしれません。

それぞれの登場人物の中に、それぞれの条理や世界があるんですね。

そういう意味で普段からやっぱり意識しないといけないというか、たぶんあの父親は石の世界というものを意識していなかった訳で、だからああいう形でしか対処できないんだろうなと思います。

自分以外の何かがあるということを意識することが自分のためにもなるであろうし、それぞれの異なる世界を意識するという事は大切だなと思います。

吉増さんご自身は2015年頃からほろびての公演に参加されています。これまでに感じる作家、演出家としての細川さんの変化や進化はありますか？

細川君が考えていること、これまでの作品にずっと通底しているものはあると思います。そしてほろびてをやりだしてからのアップデート、勉強速度がとても速い。一作ごとに視野も広くなって、考えることもどんどん深くなっている。役者への要求もより細かくなって、求めるものがどんどん大きくなってきています。

でも、昔から通底しているマイノリティへの寄り添い方といった部分は変わらず一貫していると思います。

せんがわ劇場で上演してみた印象はいかがでしたか。

まず劇場自体が素敵ですよ。コンクールということで必ずしもほろびてが好きなお客様でもなくて、本当にせんがわ劇場、演劇というものが好きな方の前で上演をできるのも貴重な機会でした。

本番では緊張はしたんですが、やはり（客席数の制限があっても）お客様が入って反応をいただくとその反応で演劇は変わるので。たとえば最初の石とのやり取りでちょっと笑いが起きたりするのを感じた時に「やっぱこれが演劇だよな」ということを実感しました。

吉増さんご自身の活動においても、コロナ禍での影響は大きいですか？

感染症の影響で客席数が半分になることも、公演自体が中止になることも経験しました。コロナ禍のこの状況で、やはり宣伝などもしづらい部分がありますよね。

「ぜひ観に来てください」ということすら憚られるような雰囲気があって、それでもやっぱり僕らはなんとかやれる道を探してやらないといけない。そうして今回のコンクールもなんとか開催して、そこにお客様が足を運んでくれる。



困難な状況下でも、お客様含めてみんな必死にやれることをやろうということで繋がっていく。実際に上演をすることで次に繋がっていくという実感がありました。

中止するというのももちろん大事な結論ですし、続けるという決断もどちらもとてもしんどいことではあります。常にどうなるかわからないという不安のなかでやるのはメンタル的にしんどい部分もありますし、落ち込むことも多くて気持ちの浮き沈みがくり返しやってくるんですが、それでも続けるということは重要だと思います。

早くこのコロナ禍が落ち着いてくれたらな、と思います。

今回のコンクール全体の印象はいかがでしたか。

今回は劇場でも他の団体さんと居合わせることもなくて、最後に表彰式とアフターディスカッションのときにZoom越しでそれぞれの団体の方を拝見しただけでした。

細川君も「(他の団体の方と)コミュニケーションを取りたかった」ということはずっと言っていましたね。

アフターディスカッションの時間はいかがでしたか？

やはりZoomでしたから、現場で出来たらやっぱり全然違っただろうなという率直な感想はありました。劇場で皆顔を合わせながらやることができたらな、と。

他の団体の方の作品のコンセプトや、どういう意図で立ち上げたのかということ、そしてそれを受け取った客席の方の捉え方の違いというのがディスカッションの中で見えたりしたのはとても建設的だなと思いました。

ただ僕なんかはいろいろ言われたらちょっと落ち込んじゃうんじゃないかな。いろいろ言われなくてよかったなと思いました(笑)。

せんがわ劇場でチャレンジされてみたいことはありますか。

細川君と去年のコロナ禍の最中に、ちょっとした台本を書いてそれを元にコンテンポラリーダンスというか、自分なりの身体表現をする映像を撮る機会があったんです。

せんがわ劇場のあの舞台上でなにかやるとすれば、一人芝居的なものやってみたい気がします。ちょうど広さとか空間の高さとか、あそこに一人で立ってみるのも面白いなって、今ふと思いました。

一人芝居なんてやったこともないですけど…。

吉増さんの今後のご予定をお聞かせください。

『あるこくはく[extra track]』を6月19日-21日に三鷹のSCOOLで上演します。今回コンクールで上演したものより10~15分ほど長くなる予定です。細川君は本当にとんでもないモノログを書いてくるので、戦々恐々としています。

また演出も変わるかもしれませんが、俳優としてはさらにクオリティというか、物語全体をもうすこし鮮明に映せればなと思います。

父親という役に関してもひとつひとつのシーンで音の高さや声の太さとか、そういうところで繊細に表現を変えていきたい部分があります。今回のコンクールの上演を経て、まだそこは完全ではなかった気がしているし、もう少しよりよくできたらなという思いがあります。

そのあと8月にはケムリ研究室というケラリーノ・サンドロヴィッチさんと緒川たまきさんのユニットによる安部公房さんの『砂の女』に出演します。

最後に一言お願いします。

今回はじめて参加して、面白いコンクールだなあと思いました。

僕はお芝居を始めたころに一度コンクールみたいなものに出てからというもの、ほとんど演劇祭やコンクールというものに出たことがなかったんです。

今回劇場でほろびてのアテンドを担当してくれた一宮君（パンチェッタ）や、運営スタッフのみなさんもコンクールのをきっかけにして劇場に関わっていらっしゃるんですね。

そういう力が集まっている素敵なコンクールだなということを実感しました。

コロナ禍でなければもっとよかったのに、と強く今思っています。

毎回関わる方が増えていって、どんどん新しいものができるような環境のコンクールになっていったらすごいなと思います。

(以上)

聞き手：松本一步（演劇コンクール制作助手・第8回コンクールファイナリスト）